

コンサルティング [意味・意義]

企画提案・・・ソリューション・・・コンサルティング・・・と多用されるようになった今日、用語の意味を確認しておくのも、大切だろう。

コンサルティング Consulting とは、総合的な戦略策定・遂行、問題解決アプローチに精通し、「業務」 | 1
または「業種」に関する専門知識を有し、主に企業等に対し外部から客観的に現状・実態分析を施し、命題・問題点を発見・指摘し、原因を分析、その対策案を示して、企業の進展を支援することである。

業務範囲は種々・様々だが、あえて二分すると、「調査分析・問題提起（提言）で終える」Implementation
= Research based、「対策案を提示するだけでなく、対策案を実行して成果を出すところまで責務を負う」
Implication = Taskforce approach がある。

黎明期には、公的資格保持者が中心となり、財務コンサルティングを公認会計士・税理士が、法務は弁護士が行っていた。

20 世紀後半になって、ビジネスそのものが高度化、組織も複雑（肥大）化し、業務は専門・分業化していく下、IT 革命によるシステム化と相俟って、企業内の人員だけでは対処しきれなくなり、外部コンサルティングに対するニーズが高まっていく。

形態としては、「シンクタンク系」「戦略系」「オーディット系」「人事系」「マーケティング系」・・・
「リサーチ系」「営業支援系」・・・等が、玉石混交・乱立している。

コンサルティング [効用]

コンサルティングを依頼する側のメリットは以下のような点にある。

1. 外的環境変化への対応・改革をスムーズに運べる
2. 新領域への進出や新事業企画開発の際、未経験のノウハウを教授できる
3. 経営意思決定のため、別角度からの情報を得られる
4. 客観的な第三者の立場から、分析結果・アドバイスを得られる

欧米では業態として確立され存在が欠かせない国際的なコンサルティング会社であっても、日本において認知度は低く、コンサルティング業務そのものに対して、好感度云々よりもアレルギーもある。

一部には「成果主義」を謳っているケースもあるものの、一般には、「張たり・張りぼて・絵に描いた餅」等の悪評（責任を取らないで掻き回すだけ）を伴うことさえあるようだ。

効用は、ひとえに第三者的・客観的な視点で企業を診断・分析・問題解決することにあるが、それには十分なビジネス経験・実技の習得に裏打ちされて初めて可能になるもの。

ところが経験不足・借物コピーが闊歩しているのが実情であることも否定できない。

コンサルティング [悪弊]

とりわけ、個々の専門家が担当・チーム編成される実態からして寄せ集めだ。俯瞰した総合的な見解なり・方向付けが不明瞭といった批判には、どう抗弁するのだろうか・・・

日本独特のビジネス風土、商慣習、チャネル実態他の理解を十分にせず、画一的な欧米流のフォーマット・ | 2
テンプレートをゴリ押し、混乱させることも・・・ままある。

発注・使う側の責任は重い。

主役・脇役、当事者（被害者・加害者）をわきまえ、侃々諤々の議論を介して、深いビジネス理解に至らないと、単なるツールの導入に止まり、目的の完遂・実行力には程遠い結果が待っている。

・・・論理／実践、方法論／実務、学問／実技・・・実力・距離感・・・(死屍累々)・・・

コンサルティング [心得]

名実共に本物・使えるコンサルタントと呼ぶにふさわしい資質と能力とは・・・？

「理論に精通してはいるが、頼り過ぎることはない」

事実に基づき、新たな理解に立ち、新機軸の有効な実践方法を提示できる。つまり、理論と実践を融合・同期するバランスに長けている。

「この領域には自信と実績がある」

秀でた専門分野は必須。そうすれば物事の本質を見極める洞察力を有しているので、幅を広げていくこともできる。

「わかりやすい表現と語彙、議論する力が備わっている」

社会人・ビジネスマンの常識をわかまえているのは前提条件。その上で、いたずらに難しい表現を使わず、易しい誰にでもわかる語り口・例えを豊富に揃え、相互理解を深める。

Thinking harder! 異なる・違うからこそ、新たな理解に立て・価値を生む!!

「創造性・構想力を駆使できる」

マニュアル（基準書）やメソドロジー（手法）通りにしか仕事ができず、応用力が身についていない。批判ばかりで対案がない。切り貼り・翻訳型人真似コンサルタント・・・これらは全くもっていただけない。

変化・変容に動ぜず、新奇・新規に果敢に挑む気概・情熱、俯瞰・構造的に捉え・理解、対応策を創り込むために、関与者を巻き込むエネルギー、マインド・スキル・インテリジェンスを常に磨き上げていこう!